

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

# メインステージは進路指導現場。 そこあってこそその公の活動



東京都立青井高校

進路指導部主任

東京都高等学校進路指導

協議会事務局長

浦部ひとみ

うらべ・ひとみ ● 1950年生まれ。慶應義塾大学文学部英米文学科卒業。都立白鷗高校定時制城北高校定時制、湘江高校、足立高校を経て、2013年度より青井高校に勤務。主幹教諭。

文／堀水潤一 撮影／渡邊力

東京都足立区は、23区の中では家庭的・経済的な課題の多い地域と言われている。

浦部ひとみは、その足立区内の高校だけで3校、16年の勤務経験をもつ女性教諭だ。それ以前は、都内北東部の2つの定時制高校に15年勤めた。計31年のキャリアのほとんどを、いわゆる進路多様校で過ごしたことになる。

浦部のもう一つの肩書きは、東京都高等学校進路指導協議会（都高進）の事務局長だ。10年の長きにわたり、東京都のキャリア教育をけん引してきた。都の教育行政にも深くかか

わり、表舞台に登場する機会も多い。

現場の進路指導部主任としての顔と、公的な立場という両面から浦部の素顔に迫る。

浦部は、足立区内のある商店街で電気店を営む両親のもと、三人姉妹の長女として育った。何となく「勉強」に重きが置かれなかった環境のなか、アカデミックなものに対する憧れが子どものころからあったという。

「親を否定するわけではありませんが、自分には別の生き方がある気がしていました。このままでは狭い世界のなかで埋もれてしまうという危機感。ここから離れる唯一の方法は勉強することという感覚が漠然とありました」

そうなると憧れるのは外国であり、武器になるのは語学だ。大学は文学部の英米文学科で学び、英語科の教員免許状を取得。未知の世界である定時制をあえて希望したのは、自分の研究活動の時間を確保したかったからだという。学究肌であった浦部の生活の主体はあくまで「学ぶこと」にあった。しかし、1986年に結婚、翌々年に長女、その3年後に次女を出産



すると生活は「変。家事、育児に追われ、研究者として大学で勤務したいという思いは消えた。」

定時制高校での勤務は、生徒とのやりとりも楽しく、意外にも性にあつてはいたが、日々の慌ただしさのなかで、何かを成し遂げたという実感まではわかなかったという。

「家庭が中心でした。生徒の成長とともに自分も必死に「日々を過ごしていました」

### 都高進事務局とのかかわり

定時制で15年間を過ごしたあと、98年、浦部は地元足立区の淵江高校に異動する。3校めに於いて初めての全日制だ。1クラスの生徒数も教職員の数も今までとはまるで異なる。

「それまでは、教員同士の内輪の会話で話が通じていたのに、ここではさまざまな会議を通して意思疎通がはかられていました。『組織』に属したことに少し戸惑いも感じました」

さらに戸惑ったのは、進路指導担当でもないので(初年度は生活指導、その後3年は学年担当)、東京都高等学校進路指導協議会(都高進)にかかわり始めたことだ。というのも、前任校の校長が、都高進の上部組織である全国高等学校進路指導協議会(全高進)の会長職にあった萩原信二であり、そこから浦部に声がかかったのだ。

「萩原先生とは前任校ではあまり接点がありませんでしたから、異動後『都高進の事務局

で書記の仕事を手伝ってくれないか』と言われるときは驚きました。いろいろな方に声をかけたなかの一人だったのかもしれない。たまたまタイミングが合い、進路の世界に引き入れてくださったことは、私にとって運命的でした」

その年から浦部は、事務局会や研究会などに参加しては議事録をとるようになり、翌年からは全高進主催の行事も手伝うようになった。「進路指導の世界など知る由もありません。言われたことを、ただこなしていただけです」

そんななか、他校、他県の多くの教員や教育関係者とかかわるようになり、浦部は視野が広がることを感じ始めた。

いっぽう、進路に関する自分の経験の無さを痛感した。これまで校務分掌で進路の担当になったことはいない。勤務していた定時制高校でも、進路指導らしい指導をした実感はなかった。

「都内外のいろいろな方から、学ぶことができているのはいのですが、人の話を吸収するだけでこちらから提供できるものがありません。地元の事例を質問されても答えに窮することが多々あり、とても辛かったです。年齢も40代に入り、都高進事務局という立場にいるのに情けない、という思いでいっぱいでした」

だからといって、辞めようとも思わなかった。「都高進での活動について、周囲から『その道何十年というベテランがやるべきもので、全日制に来て1〜2年の教員が務まるものではない

い』と言われたこともあります。確かにそうなのでしょうが、かと言って、『そうですか。私の幕ではないですね』と言って引込むタイプの人間ではありませんし」

恥ずかしい思いをするほど、浦部は「早く経験を積みまねば」という気持ちを強くした。

### 全高進で視野を広げる

都高進にかかわって3年めの2000年、浦部は全高進の「就職指導研究委員会」に加わる。

「萩原先生を中心に活動を活性化させた委員会でした。各県から就職指導に長けた先生方が集められるなか、なぜか経験の浅い私に声がかかったのです。ベテランの先生に助けていた大きながら、必死で役目を果たしていました」

今も続く同委員会のもっとも重要な作業は、毎年開催される「新規高卒者就職問題連絡会議」の資料を作成することだ。同会議は、厚生労働省、文部科学省の担当者、進路指導現場の教員が一堂に会し、その年度の高校卒業者の就職状況について報告や意見交換を行うもの。

浦部らの役割は、まず都内各校に就職状況に関するアンケートを実施し、東京ブロックの意見として集約すること。そして、北海道から九州まで全10ブロックからあがってきた意見をまとめ、全高進としての意見として集約したうえで報告するというものであった。都の状況をとりまとめるには現場感覚や地域の現状のトレンドや地域性にも精通する必要があら

「集計に際して、『うちの学校でこういうことがありました』区内の高校では複数の先生がこう話しています」といった意見をまとめるわけです。それをさらに、『関東では』『全国では』とまとめる過程で、例えば『これは都心独自の傾向だ』これは関東特有の課題なのだ』といった気づきが生じてきます」

そうした作業を通じて、「常識だ」と思っていたことに地域性があることも知った。インターシップの際、現場に教員が付き添う県があることや、就職試験を受ける際にかかる旅費・交通費は全額企業負担というのが常識である県もあることなどもそのつたとす。

「北海道や沖縄の先生方と会議で話した後、懇親会に同席することも多いです。地域の事情やオフレコの話も聞くことができ新鮮でした」

### 進路指導部主任としての問題意識

淵江高校に赴任して5年めの02年、浦部は初めて進路指導部の担当、しかも主任となった。

「都高進にかかわって丸4年が経ち、自分なりに、進路指導のあるべき形が見えていました。そのイメージどおりに現場を動かしたかったため、主任を任されたことは幸いでした」

とはいえ、都高進での役割は組織のマネジメント。いくら見聞を広めたとはいえ、現場の進路指導とは勝手が違うのではないかと。

「そこが進路のおもしろいところ。大学進学指導、専修学校、就職、進路学習などの研究会で得た情報は、すぐ現場の生徒や先生に還元できます。それに、活動を通して、他県の先生



や私学の先生、民間の教育関係者や行政の方とも知り合えます。そのため、困ったことが生じても、相談相手がすぐに頭に浮かぶのです」

仮に都高進などの活動をやめ、学校内のみで過ごしていたら、その後、行うさまざまな取り組みはできなかつたであろう。逆に言うところ、現場があるからこそ公的な活動も続けられるのだと浦部は話す。どちらがメインステージかと言え現場だ。いっぽうで、こうも口にする。

「教員の本音として、『母校が良くなればよい。他校のことまで考える余裕はない』という感覚もあるでしょう。私も、それがまったくないといえは嘘になります。ただ、こうした立場に身を置くと、目の前の生徒のことだけではなく、『高校生をどうにかしなくては』『日本の未来を変えたい』などと視野が広がってきます」

そうした課題意識を特に強くしたのは、04年ごろだという。『労働白書』（03年版）で217万人とカウントされるなど、「フリーター全盛時代」と言われた時期だ。

「そのあたりから危機感を強くもつようになりました。フリーターはともかく、働かない若者も大勢います。その子たちの高校時代を想像するに、大人に対する不信感を募らせていたり、親や教員から相手にされていないか、そんな風に過ごしていなかったらどうか。そう感じたとき、突き動かされるものがありました」

この時期、同校にNHKの取材が入り、クルーが半年ほど学校に常駐していたことも、そうした問題意識を増幅させていった。

外部連携の必要性が盛んに言われ始めた時期でもある。浦部の周辺でも、ハローワークとの連携や、地域との連携、中学校との連携など、さまざまな機関とのかわりが増えてきた。

「生徒を育てているのは教員だけではありません。地域や社会全体が若者の育成にかかわってほしい、という見方にも変わってきました」

04年は、浦部の立場にも転機が訪れた年だ。都高進にかかわりだして7年め、事務局長になったのだ。そうなるに働き方やスタンスは

それまでと変わってくる。都高進、全高進の業務に加え、関東地区高等学校進路指導協議会の事務局長会にも参加する必要があり、各種の会合や研究会が連日続くようになった。事務的な作業は膨大で、プライベートの時間が削られていくうえ、対人関係の気遣いも増えた。

「全体を見渡す立場であり、部会の動きはもちろん、関高進や全高進とのつながりにも目を向けないといけません。公立ばかりではなく、私学協会など、さまざまな関係者にお話しをする必要もあり、人とのつながりを、より重んじるようになりました」

### 足立高校での進路指導

都高進の事務局長に就任した翌年の05年、浦部は足立高校へ異動した。かつては有数の進学校として知られていたが、学力レベルは伸び悩んでいた。だがその年、東京都の「重点支援校」の指定を受けたことで、校内には進学校として生まれ変わるのだという雰囲気があった。

そんななか、1〜3年ともちあがり、で学年に入った浦部は、学年行事として、インターンシップや「仕事セミナー」を始める。仕事セミナーとは職業人を招いての体験学習のこと。以前、取材を受けたNHKのディレクターや、知り合いの足立区職員や看護部長などに協力を呼びかけたところ、快く応じてくれた。

4年めに進路指導部主任になると、さらにいくつかの取り組みを開始する。まず、同校ではしばらく作成が途絶えていた「進路の手引

き」を編集。また、生徒一人ずつに「進路カード」を作成した。これは、顔写真が貼られた履歴書の書類で、生徒が記入する「希望進路」欄や、担任が記入する「面談記録」欄が設けられている。これによって、学年がもちあがっても担任や進路指導部で生徒の情報が共有できる。

NPOと連携した「金銭基礎教育」も実施した。学費や奨学金、親の援助、アルバイト収入などを生徒にシミュレーションさせ、卒業後のリアルな生活設計を立てさせるプログラムだ。

「一人暮らしが、いかに大変なことかなどに気づく生徒もいます。社会にでて戸惑う前に現実を想像することで、地に足をつかせながら、夢実現の具体的な方策を考えるようになるなど、効果をあげています」

ただ、職業や就職についての理解を深めさせたり、専門学校の情報を広く与えたりする浦部のやり方に不安を抱く同僚もいた。

インターンシップを提案した際は、「進学校を目指そうとしている普通科高校がやることではない」という意見も出た。また、専門学校のきめ細かいガイダンスについては、「学校は各自の判断で選ぶべきもの。そんな指導をしていたら3年後みんな専門学校に行ってしまう」という声も聞かれた。かつてのそうした批判に、今も浦部は強く反論する。

「専門学校は仕事と直結していますからミスマツチが許されません。こちらから正しい情報を提示しないと、生徒の思い込みで、あらぬ方向に動きだすこともあります。大学進学者を増やしたいとはいえ、実際には、専門学校進学を希望する生徒は大勢います。個別に対応して、いねいに指導することが、結果的に進路

実績の向上にもつながると考えていました」

実際、浦部が担当していた学年は、大学進学希望者が増え、進路未決定者が大幅に減った。何より大切なのは、全体の数字ではなく、生徒一人ひとりの人生だ。浦部は、看護師志望のある男子生徒のことが印象に残っている。

「その生徒は、私立の看護学校に合格したのですが、後日『家族会議の結果、期日までには払う納入金がないからフリーターになる』と担任に告げて帰宅しました。驚いた私は再登校を促し、母親も学校に呼びました。『うちは一人親家庭でお金がない』でも、このままでは彼の将来はどうなりますか？』という押し問答が続き、『とにかく明日区役所に行き、奨学金の相談をしてください』と言ってその日は引きとつてもらいました。翌日、その母親は、勤め先の事業所に休暇をもらい区役所に足を運んでくださったのですが、残念ながらいい返事はありませんでした。ところが事態は急転。事情を聞いた勤め先の所長さんが105万円全額を貸してくれたのです。必死で動けば助けてくれる人も現れるんですね。特にこのあたりは、人と人とのつながりが強い地域ですから。その子は卒業し、無事看護師になりました」

この事例に限らず、浦部が勤務する地域には、困難な事情を抱える家庭が少なくない。貧困が連鎖していく実態も間近に見てきた。

「足立区で生まれ育ち、長く勤務している者として、そうした状態を黙って眺めているわけにはいきません。ここは子どもたちにとっての居場所ですが、私にとつての居場所でもあります。地元出身の教員ということに親しみを感じてくれる生徒も大勢います。職場が地元というのは

私の強み。不思議ですね。小中高時代は、ここから出たいとばかり考えていたのに」

## 都のキャリア教育とともに

13年、浦部は青井高校に異動した。自身3校めとなる足立区の高校だ。同校は昨年度より、都の重点支援校に指定され、キャリア教育を軸とした学校改革をスタートさせていた。

特に、東京都地域教育支援部生涯学習課による「企業・NPO等と連携した都立高校生の『社会的・職業的自立』支援事業」に基づき、他校の先陣を切つて、今年度から学年進行で独自のキャリア教育プログラムを展開している。

同事業の中心人物である都教委の担当者とは、都高進の活動などを通して長年の付き合いがある。浦部は、公募に応じる形で同校に移り、3年間の系統だったプログラムを作成した。

事業名にもあるように同プログラムの核は外部との連携だ。それは浦部がずっとやりたかったこと。それまでNPO等と連携した実績はあるものの、いわば単発のイベントで終わっている。体系的なプログラムを作るのは初めてであり、諸団体との打ち合せは念入りに行われた。

初年度の連携先は3つ。NPO法人「キッズドア」との連携では、40人近くの大学生と高校生とが、互いに本音で語り合うグループワークを実施した。

「期待以上の反応がありました。本校の生徒にとつて大学生は雲の上の存在かもしれませんが、実は身近な相談相手だと気づくのです。大学生やクラスメイトの話聞くなかで、自分分はどうしよう、と考えだす姿が印象的でし

た」

浦部はNPOの活動に期待している。

「少し前までの閉鎖的な学校には、『外部の人を入れてくれない』とか『生徒をさらすのは恥ずかしい』という雰囲気もありましたが、今は学校が外に開かれていた時代。NPOの方々からは、子どもたちを支えたいという気持ちが伝わってきて心強いし、大変助かっています」

こうした自校でのキャリア教育プログラムの展開とはべつに、浦部は昨年度から、東京都教育委員会の仕事にも深くかかわっている。「高等学校教育開発委員会（キャリア教育部会）の委員として、普通科高校におけるキャリア教育の具体的な展開の方策について研究開発を続けているのだ。昨年度のテーマのつが、まさに外部団体との連携であり、今年度は、さらに新しい要素を付加し、キャリア教育に新たな風を呼び込むという。

「夏季休業中も通し会議が行われています。キャリア教育に対する東京都の意気込みをかつてないほどに感じています。その員として働けるのは光栄です」

もともと研究職に憧れ、必ずしも教員になりたかつたわけではない。定時制に長く勤務したのは家庭と両立するため。進路に携わったのもたまたまだ。それが今やキャリア教育の仕事に没頭しているのだから人生はわからない。

現場の進路指導部主任として、都高進の事務局長として、そして都の研究開発委員として、浦部は、これからもますます多忙な教員人生を送ることになる。

モチベーションについて浦部はこう話す。



「使命感とか責任感とか危機感とか、いろいろ理由はつけられますが、つき詰めると、やりたからやっているのじゃない。嫌なら辞められるのに、それでもやっているわけですから」

英語科の教員としての役割以外にさまざまな仕事が増えてきたが、それについては、自分と折り合いをつけている。

「私より優れた英語教師はたくさんいます。でも、キャリア教育に関してはそう簡単には譲れない、という自負心をもってあたっています」

さらに、こうも語る。

「現実には、子どもたちが迷い、試練と戦っているなか、教員が教科指導に埋没していいのだろうかとも思っています。教員免許状に何と書かれていようと、子どもたちと向き合えば、少しでも長く話し、生き方をふまえたガイダンスをする必要が、すべての教員にあると感じています」(敬称略)